

平成 30 年 7 月 3 日現在

機関番号：30105

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H04108

研究課題名(和文) 北海道沿岸部における先住民/移民の漁場を下敷きとする歴史基盤の構築に関する研究

研究課題名(英文) Studies on the Creation of Historical Infrastructure on the basis of Fishery Zones by the Indigenous and the Immigrant in the Coastal Areas of Hokkaido

研究代表者

三宅 理一 (Miyake, Riichi)

藤女子大学・人間生活学部・非常勤講師

研究者番号：70157618

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,200,000円

研究成果の概要(和文)：北海道沿岸地域の歴史性に着目し、厚田一帯の集落・都市形成を探り、地域固有の歴史遺産の実態を解明し、人口移動の様相を幕末の開港地函館や内陸部の美瑛等と比較する。さらに、地域の資産を未来に引き継ぐために参加型ワークショップを介して地域の潜在資源を探り、その共有の仕方を問う。調査研究の結果、古潭に古層としてのアイヌ集落の存在が認められ、その土地利用と居住実態、和人の移住による漁場の発展等が明らかになり、その頃形成された寺院や漁家などのタイポロジーが解明された。地域住民の遺産に対する意識は相対的に低い、他者に関われたオープンソースの遺産の考え方を立ち上げ、地域の潜在資源を掘り取ることが肝要である。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the historicity of Coastal Areas of Hokkaido, urban formation process around the port town of Atsuta was analyzed in terms of population dynamics so as to clarify its unique historical heritages in comparison with other areas like Hakodate and Biei. In order to inherit local properties to the future generation, participatory workshops were organized in search for its potential resource and its sharing system. The field research has resulted in the identification of Ainu settlement in Kotanbet and the clarification of their land use and daily life. The immigration of Japanese accelerated the formation of the fishery zone around there. The unique typologies of local temples and residences were also identified. The awareness of local residents towards their heritages is comparatively low, but the implementation of open-source heritage management system, which allows the intervention of the third persons, will contribute for disclosing the potential resources of this area.

研究分野：建築史

キーワード：場所 アイヌ 入植者 居留地 曹洞宗寺院 払下げ 潜在資源 創造的歴史都市基盤

1. 研究開始当初の背景

本研究は、北海道の中での歴史性の強い沿岸部、とりわけ厚田を対象となし、漁港として発展した同地の歴史的環境をめぐって定住／移住という観点から地域の資産の発掘を行い、その価値づけを行うことが求められた。その過程で浮上してきた資産の系を「創造的歴史都市基盤」と位置づけ、歴史的景観を含む地域資産のもつインパクトを考慮し、住民たちの意識の奥底に潜んでいる「未だ見えない潜在資源」をも加味して、将来へのポテンシャルを測定することが目論まれた。

2. 研究の目的

- (1) 厚田を含む北海道沿岸部に関し先住民／移住民に焦点を当て都市基盤の形成ならびに土地利用の変遷を解明する。
- (2) 幕末から明治・大正期に成立した建築遺産について実測調査を踏まえてその意匠的・構造的特徴を明らかにする。
- (3) 地域住民に間における上記の歴史資産の共有度を測り、物理的・心理的な歴史資産の重要度を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 国立公文書館、北海道立文書館、北海道大学付属図書館等において古文書、地図、図面等を収集し文献調査を実施。
- (2) 厚田、石狩、函館等において歴史的建造物の実測調査を実施。
- (3) 厚田、札幌等での子供を含む住民を対象とした意識調査、地域ゲームの実施。
- (4) 地域ワークショップを介した地域の「物語」の創出と「絵本」の創作。

4. 研究成果

4-1. 都市基盤・都市史的考察

(1) 厚田場所から漁港へ

蝦夷地の海岸線は松前藩の「場所請負制度」にもとづいて最大時で85か所に及ぶ「場所

(漁場)に分割され、厚田場所もそのひとつであった。明治初年のこの地域の土地利用に関しては『厚田全郡漁場図面』に地籍図のかたちで明示され、運上所はヲシヨロコツ(押琴)に建ち、その南隣のコタンベツ(古潭)に請負人の屋敷、漁民の住居が建ち並んでいたが、一連の文書調査を通して古潭川沿いに幕末期の厚田場所の土地利用を復元し、明治中期にかけての変遷を解明した結果、川沿いのアイヌ集落→泊地と運上所をともなう「場所」の形成→海岸沿いの和人漁民集落(夏期のみ)というかたちで段階的に和人と混住が起こり、明治期に入って運上屋の廃止にともなう新たな網元層の形成、都市(漁港)化に到るプロセスが明らかとなる。当時のアイヌ人別帳からアイヌ集落の変遷も明らかとなり、19世紀初めには130人を数えたアイヌが幕末には30名程度、そして1900年にわずか1人となっていく仔細が明らかとなる。

施設立地の観点から見ると、もともと古い運上屋(後に本陣、駅通)や幕末に創建された曹洞宗寺院、出稼ぎ漁民の住宅に加えて、明治初年以降、開拓使施設(出張所、役宅など)が建設されるが、漁場の中心がコタンベツの北に位置するアッタ(厚田)に移り、新たな道路基盤を整えて公共施設(役場、病院など)や新たな宗教施設が市街地内に造られるようになり、漁港としての姿を整えていく。その過程で佐藤弁蔵(1830-1903)、佐藤松太郎(1863-1918)といった名士が登場するが、今回の調査で両家を含めた建築遺構、文書などについて多くの発見があった。

1880年代から人口が急増し、1950年に人口ピーク(6,722人)を迎えた後、人口減少に転じる。今日の人口は1,900人ほどである。

(2) 開港地函館の外国人居留地

箱館に初めての外国人が到着したのは1854年で、1860年代には定住外国人数は数十人を数えるようになる。外交団における施設立地は領事館などの外交施設が中心となるが、そ

の建設にあたっては、造成工事を奉行所が行い、上物の建築は、奉行所が作事する場合と、当該国側で費用を負担して自前で造作する場合の二通りがある。「土地・建家貸渡」方式の典型が英国領事館で、奉行所はそのため「英館御普請掛」なる造営部門を設けていた。ロシアの場合、領事館自体は英国と同様土地・建家貸渡としたが、その隣に計画した病院は土地のみ貸渡で施設は自弁で建設した。米国については露英に隣り合った館地が提供され「亜米利加館普請掛」が 1862 年に工事を始めるが、翌年に工事は中断する。この敷地の坂下に登場したのがフランス領事館で、奉行所の役宅を大改装してフランス側に提供された。隣の米国領事館用地は最終的にフランス側が引き取って教会用地となす。今日のカトリック元町教会の前身である。箱館は繰り返し大規模火災に遭い、元町地区において開港期の建築として残っているものは実質的に存在しないが、今回の調査で各領事館の位置が同定された意味は大きい。

(3) 内陸部美瑛の場合

十勝岳の麓に位置する美瑛の場合、移住者 10 人が入植するのは 1894 年で、1900 年に神楽町から分離して美瑛村を構えた時点での人口は 455 人で「産業未タ奮ハス人気沈鈍ノ感ナキニ非ス」という状態であった。明治末に到って人口は急増し、1920 年には 13,540 人を数えた。戦後になって再度の人口急増を見せ、1960 年には 21,743 人となる。その後は人口減に転じ、現在は 10,200 人台である。美瑛の人口動態で特異なのは、戦後に樺太等の引揚者を新規開拓者として引き受け、新たな農地を開墾した点である。緊急期開拓入植者を含めて戦後開拓入植者数は 658 人（1945－1962）と記録されているが、その中には引揚者や軍人に加えて他府県からの移住者、近隣地域からの入植者等が含まれる。今回の調査で示されたのは、戦後開拓のための農地が明治期に官有原野 5,078 ha を「諸

兵演習地」として確保された陸軍演習場と御料地の払下げによって調達されたという点である。この時払い下げられた旧演習場は、今日的美瑛の農地の半分を占める。1970 年代に入り、丘陵地に展開するこれらの農地が「美しい」農業景観として着目されるようになり、美瑛の観光資源としても寄与する。

4-2. 建築遺産の実測調査

(1) 龍澤寺

古潭の龍澤寺は『龍澤寺文書』や『厚田郡諸調』によると、場所請負人の濱屋平田与三右エ門の発議により、彼の死後アッタ支配人たる福嶋屋源蔵らが建立世話人とし、小樽の龍徳寺から住職萩野泰能を招いて創建された。建立年は1862年か1863年に絞られる。ただ、この寺院は建設後まもなく降雪の重みで倒壊し、しばらくの間、廃止された開拓使の出張所の払下げを受けてそれを寺院に転用して用いていたが、1893年になって現行の新本堂が建てられた。現存する見積書から導かれるのは、新本堂が完全な新築ではなく「改築」であり、既存の旧開拓使出張所の建物の部材を極力用いつつ、寺院の様式に合わせたものである。実測によると本堂は内陣と外陣、広縁からなる梁間6間半、桁行7間半、入母屋平入である。平面は伝統的な曹洞宗の本堂の形式を踏襲している。

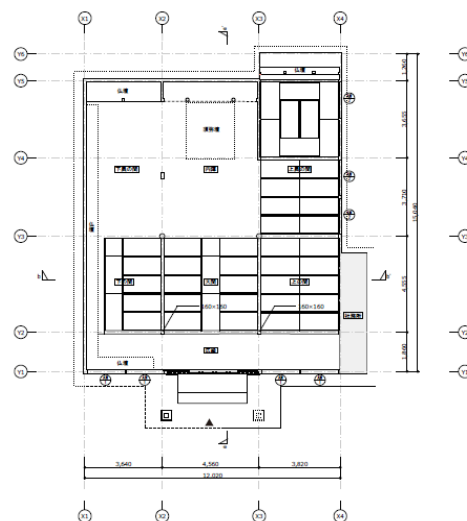


図1 龍澤寺（古潭）実測平面図

(2) 正眼寺

『厚田郡諸調』によると龍澤寺より1年早く1862年の建立とされる。内陣と外陣、広縁からなる約7間×8間半の木造平屋建てで、切妻平入である。曹洞宗の基本平面計画を踏襲しているが、龍澤寺とは異なり、外陣から内陣が後方に突き出る平面形状で、外陣のまわりに半間幅の脇陣が回っている。意匠としては禅宗様が基本であるが、特に凝った内陣内部は構造とは切り離れた化粧の斗栱が用いられており、簡素な軸部の間に装飾性の強い虹梁や斗栱を入れ込んでいる。実測調査の過程で、1895（明治28）年の棟札が新たに発見され、棟梁については遠藤喜三郎とその子遠藤常吉と記されている。

(3) 旧佐藤家住宅

明治後半から大正期にかけて網元として活躍した佐藤松太郎の母のための住宅であり、1902年前後の建立とされる。貴賓の往来を前提として座敷に直接入ることのできる式台風の「本玄関」、仏殿風の出桁の意匠など、他には見られない特徴をそなえている。小屋組は貫や方杖によって桁行方向の拘束を強くした独自のトラス架構で、洋小屋・和小屋の折衷形を窺うことができる。

(4) 古潭旧内山家住宅

古潭に現存する民家の中でももっとも古いとされるが、正確な建築年代は不明、様式的に旧佐藤家と同時期と推測される。寄棟、木造平屋民家で、主屋はL字型の平面、正面は海岸に正対して、奥に土間の作業空間が続く。小屋組は洋小屋で、トラスの組み方に旧佐藤家住宅との類似性が見られる一方で、梁と桁の取り合いに差異が見られた。材の断面寸法も旧佐藤家住宅に比べてひとまわり小さい。

4-3. 創造的都市基盤の構築

地域潜在資源を探るべく地元・外国人・専門家による発見提案型ワークショップを組織。

(1) 地元小中学校とのワークショップ

ロシア人専門家の参加を得て、地域のランドスケープや建築、街並みに潜在する豊かなイメージを汲み取り、それを創造的な物語に転化する。地元厚田の小中学生、札幌の大学生・大学院生、外国人専門家が参加した。ストーリーテリングを骨子としたこの方法は、町の断片から現実とは異なるイマジナリーな世界を見やり、厚田という場所が想像力の中でまったく新しい場所に変化させることを意味している。過疎化、少子化という問題とは別次元で、子供の奇想天外な想像力から「楽しく面白い町」の可能性を見る。

(2) カードゲーミングを通じた中学生ワークショップ

潜在的な資源の可能性を明らかにするため、カードゲームの手法を採り入れて「まち」のイメージを抽出する。地元中学生とともに厚田地区の「宝物」を示す「色彩のカードゲーム」を制作し、完成したカードの分析から子供たちのイメージや潜在意識を読み取る。制作されたカードの図像は景観に関するものが多く、読み札も同様の傾向が指摘できる。逆に歴史性に関するものは限定的であり、子供たちの間では、歴史遺産はそれほど共有されていないことがわかる。逆に、日常接する自然と景観は常日頃彼らにインパクトを与え続けているが、古い街並みや建築は彼らの意識の中ではマイナーであるようで、今後の歴史遺産の利活用の際に示唆的である。

4-4. 考察

(1) 定住民と移住民

今回の調査研究を介して幕末から明治初年に到る厚田におけるアイヌの集落が確認され土地利用の実態が把握された。アイヌ集落から和人漁民の集落への転換はドラスティックで、今日受け継がれている都市構造は幕末から明治初年に形成されたものである。北海道の人口増加は明治末から始まるが、明治初年の都市構造が生きているという点で厚

田は大きな意味をもつ。美瑛のような後発の農業地でも明治後期の都市構造が生きているが、同時に戦後の開拓地の造成が新たな土地利用形態をもたらした。

移住者の登場は技術移転のきっかけとなるが、そのもっとも具体的な例は箱館の外国人居留者である。建築意匠、構造などの面で自国のノウハウを転移した。その受け手である大工棟梁たちは簡単な指示書をもとに新たな技術に取り組むわけであるが、幕末から明治初年に洋小屋などの技術が一気に広まったことを見てもその影響力は甚大であった。再考すべきは第二次大戦後の樺太引揚者の存在である。60万人にも上る樺太引揚者の大半は上陸地の函館から道内各地に移住し、美瑛のような国有地の払下げによる緊急開拓地で粗末な住居に住んで開墾に取り組んだ。北海道の行政機構では官と軍が跋扈し、その結果として建築施設の「払下げ」のメカニズムが生まれることになる。厚田では開拓使出張所の払下げが新たな寺院建築を生み、美瑛においては演習場の払下げが今日の「美しい村」の下敷きとなる開拓地を生む。函館では外国人居留地の転用が白百合学園のような学校を成立させた。土地利用と建造物の履歴から転用の歴史を紐解くことが可能である。

(2) 地域の遺産の実態

遺産学的な視点から見ると、北海道は明らかに歴史的建造物が少ない。しかし、研究者数が少ないこともあり、それらの歴史的建造物研究はまだ途上にあり、データベースの面でも不十分である。今回の調査で厚田における新たな住宅（漁家）タイポロジーが抽出されたが、それらを北海道全体の文脈に移し替えるためには、今後の他地域の詳細な研究調査が必要である。技術移転に関する可能性が浮上したが、その裏付け調査も必要である。

文書の保存という面では、今回発見した『龍澤寺文書』は古潭の歴史を知る上できわめて重要であり、また石狩市立図書館の寄贈され

た佐藤弁蔵関係の文書も明治期の厚田の歴史を紐解く上で大きな役割を果たすに違いない。場所請負人であった濱屋関係も、子孫が中心となって研究会が組織され、近江商人としての源流から明治期に到るまでの歴史が解明されつつある。こうしたアーカイブ上の歴史（建築史）研究と各地の遺構の調査研究が強く結びつくことが大いに望まれる。

(3) 地域資産と創造性

地域の資産は、その物理的実体とは別に、地域の人々（当事者）との距離によって内容が異なる。既知／未知、顕在／潜在、共有／排斥といった具合に、その様態はさまざまである。今回の調査研究では地元の間人たちにそうした資産の存在を尋ね、あるいは再発見してもらい、それを意識野に置くことを目的とした。専門家に加えて「他者」の眼が「潜在資源」を顕在化させる上で大きく貢献する。加えて重要なのは「物語」を生み出す自由な想像力である。今回のワークショップから生まれた「ロシアから来た空飛ぶ船の漂着」という絵本の筋書きが、日本海に向かって景色が広がる厚田の心的情景と重なっていることは容易に察しがつく。ただ、色彩カードゲームの結果、厚田において歴史遺産が住民の中で十分に把握されていないこともわかった。北海道では先祖からの土地という概念はなく、先住民の存在が地域から消失した現在、人々は歴史的な文脈にはさほど執着しない。こうした傾向に対して提起されたのが、外来者であっても自然に立ち入ることのできる「オープンソースの遺産学」である。他者に開かれた開放的な遺産と資産の系を提示できるという点で有効である。

4-5. 結

北海道の人口動態を踏まえた建築史・都市史研究を通し、先住民アイヌの集落という古層の上に和人のコミュニティが幾層にもわたって積層し、引揚者の移住も含めた多様な地

域空間が浮かび上がってきた。建築遺構・都市空間・景観要素を下敷きに地域の潜在資源を加えた総体が「創造的歴史都市基盤」だとすれば、その内容は日本の近代史の中でマージナルでありながら大きな意味をもつ。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 三宅理一・前島美知子「陸軍演習場用地の『開拓』による景勝地の形成に関する研究、その1 美瑛演習場の設置と用地取得」日本建築学会北海道支部研究報告集 CDROM
- ② 吉田拓・小澤丈夫・三宅理一「北海道石狩市厚田区旧佐藤家住宅と旧内山家住宅にみる平面と架構の特徴」日本建築学会北海道支部研究報告集 CDROM
- ③ 小原慧汰郎・渡辺洋子・三宅理一「函館カトリック教会の建築について」日本建築学会大会学術講演梗概集2017年 pp.169-179
- ④ Riichi Miyake "Formation of Scenic Place by way of Exploitation of Former Military Exercise Field in Hokkaido", Roberta Luciani ed. 'Military Heritage from 20th Century; Preservation, Reuse and Management' ICO-FORT Norway, Oslo, 2017, pp.78-89、査読有
- ⑤ Riichi Miyake, Ayaka Hisashima "Tourism in Hokkaido and Female Tourist Behaviour" 'Learning Communities for Intercultural Dialogue for Territorial Development' Fondazione Romualdo Del Bianco 2016, pp.309-312
- ⑥ Riichi Miyake, Rumi Okazaki "Emergency Community Design for the purpose of Relief and Reconstruction after the Calamity" Alban Mannisi ed. 'Model Transfer Social Ecology in Asian Territory', 2015, pp.48-59 査読有
- ⑦ Riichi Miyake "Conservation Policy for Catholic Community in Hakodate, Japan" *Proceeding of the 20th Inter-university Seminar on Asian Megacities*, B5-02, CD-ROM
- ⑧ Riichi Miyake "Two Extremities of Global Urbanization: Megacity and Shrinking City" *Proceeding of the 8th International Policy Forum on Urban Growth and Conservation in Euro-Asia Corridor*, Teheran, Iran, 2015, p.5

[学会発表] (計 8 件)

- ① 三宅理一・前島美知子「陸軍演習場用地の『開拓』による景勝地の形成に関する研究、その1 美瑛演習場の設置と用地取得」日本建築学会北海道支部研究報告会、2018
- ② 吉田拓・小澤丈夫・三宅理一「北海道石狩市厚田区旧佐藤家住宅と旧内山家住宅にみる平面と架構の特徴」日本建築学会北海道支部研究報告会、2018
- ③ 小原慧汰郎・渡辺洋子・三宅理一「函館カトリック教会の建築について」日本建築学会大会学術講演会、2017

- ④ Riichi Miyake "Formation of Scenic Place by way of Exploitation of Former Military Exercise Field in Hokkaido" ICOFORT Norway, Tromsø, Norway, 2017
- ⑤ Riichi Miyake, Ayaka Hisashima "Tourism in Hokkaido and Female Tourist Behaviour" *International Symposium at Fondazione Romualdo Del Bianco*, Firenze, Italia, 2016
- ⑥ 小澤丈夫「美瑛のまちづくりー風景とまちのアンビギュイティ」藤女子大学主催国際シンポジウム「イマジナリー厚田ー縮小都市の創造基盤をめぐって」札幌、2015
- ⑦ Riichi Miyake "Conservation Policy for Catholic Community in Hakodate, Japan" *20th Inter-university Seminar on Asian Megacities*, Manila, Philippines, 2015
- ⑧ Riichi Miyake "Two Extremities of Global Urbanization: Megacity and Shrinking City" *8th International Policy Forum on Urban Growth and Conservation in Euro-Asia Corridor*, Tehran, Iran, 2015

[図書] (計 3 件)

- ① 三宅理一監著『境界線<ボーダー>から考える都市と建築』鹿島出版会、2017、総頁数 420 頁
- ② 三宅理一・小澤丈夫『美瑛町国際ワークショップ報告書』北海道大学大学院建築史意匠学研究室、2016、総頁数 50 頁
- ③ 伊井義人編著『多様性を活かす教育を考える七つのヒント』共同文化社、2015、総頁数 160 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三宅 理一 (MIYAKE Riichi)
藤女子大学・人間生活学部・非常勤講師
研究者番号：70157618

(2) 研究分担者

伊井 義人 (II Yoshihito)
藤女子大学・人間生活学部・教授
研究者番号：10326605

小澤 丈夫 (OZAWA Takeo)
北海道大学・工学系研究科・教授
研究者番号：20399984

岡崎 瑠美 (OKAZAKI Rumi)
慶應義塾大学・環境情報学部・非常勤講師
研究者番号：90780792

(3) 研究協力者

外崎 由香 (TONOZAKI Yuka)
藤女子大学・人間生活学部・非常勤講師

工藤 義衛 (KUDO Tomoe)
いしかり砂丘の風資料館・学芸員